

地域の先人を大切にする

災害が起こらないように、被害が少しでも軽減されるように、地域のために尽くしてきた人は四国の各地にいます。地域の人々はこれらの先人を代々大切にしてきました。今回は西山九郎右衛門と下見吉十郎を取り上げます。

■豊田台地に水を引いた西山九郎右衛門（香川県観音寺市）

西山治右衛門が豊田台地（観音寺市新田町）の開墾を始めたのは明暦4年（1658）でした。開墾に伴い住む人は少しずつ増えてきましたが、豊田台地には水が少なく、日照りが続くと作物が枯れることがしばしばでした。そこで、治右衛門の子・九郎右衛門は奥谷に新しい池を築き、水を豊田まで引くことを考えました。寛文2年（1662）に工事にかかりましたが、用水路の道筋にあたる岩鍋池の縁は高さ8mもの岩が300mもの間続く固い岩盤でした。九郎右衛門は一晩中岩の上で芋の蔓を燃やし、焼けた所に水をかけて岩にひびを入れ、ノミやツルハシで削っていくという方法で、1年余りで用水路を完成させました。西山九郎右衛門は、新田町の金安神社境内に西山神社としてまつられています。〈参考資料：観音寺のすがた編集委員会「観音寺のすがた」2003年〉



■甘藷の栽培を広めた下見吉十郎（愛媛県今治市）

大三島の向雲寺（今治市上浦町瀬戸）には、下見（あさみ）吉十郎の功績を讃えて「いも地蔵」がまつられています。吉十郎は、正徳元年（1711）に諸国巡礼の旅に出た折に、甘藷の栽培が大三島などに適していることを知り、郷土のため薩摩の禁制を犯して密かに甘藷を持ち帰りました。その栽培は大三島や周辺の島々に広まりました。これは、幕府が薩摩から種芋を取り寄せ、青木昆陽に命じて甘藷を試作させる20数年も前のことでした。吉十郎のおかげで、享保17年（1732）に伊予国が長雨などにより飢饉に見舞われ、三千数百人の餓死者が出た時にも、芸予諸島では餓死者が出なかったと伝えられています。〈参考資料：上浦町誌編さん委員会編「上浦町誌」1974年など〉

